
発展学習2-2 好子と嫌子の呼称問題

好子と嫌子の定義については「第2章 2.5 好子(コウシ)と嫌子(ケンシ)」及び関連する章で説明した通りですが、行動分析学の入門書では従来、これらは、「正の強化子」、「負の強化子」というように呼ばれていました。このほか、英語でも日本語でも以下のように何通りかの呼称があります。

好子：「正の強化子」、「陽性強化子*1」、「positive reinforcer」、「reinforcer」

嫌子：「負の強化子」、「陰性強化子」、「罰刺激*2」、「弱化子*3」、「negative reinforcer」、「punisher」、「aversive condition」*4)

「好子」、「嫌子」という呼称は、杉山ほか(1998)が提唱している呼称であり、その経緯については、以下のように記されています。

好子」「嫌子」「弱化」の3語は、我々が作った専門用語である。ふつうは、それぞれ、「正の強化子」「負の強化子」「罰」とよばれている。また、出現とか消失という環境の変化を記述するために、ふつうは、それぞれ、「正の〇〇」「負の〇〇」という用語が使われている。たとえば、この章で扱った「好子消失の弱化」は、他の本では「正の強化子を除去して、負の罰!!!」などといわれている。何と煩雑なことだろう。また、「負の強化」とは、嫌子消失による強化のことだが、“負”を【と?】という字のイメージから、「罰」と混同するケースが後を絶たない。英語圏でも同じように、学生たちが混乱してしまうという。本書が従来慣行を捨てたのは、このような煩雑な用語が、学習の妨害になると考えたためである。この試みは、1993年11月に発行された本書の暫定私家版以来、読者にはおおむね好評のようである。なお、「弱化」という用語の考案に際しては、Halzem & Miles (1978)にヒントを得た。【杉山ほか(1998)、66

*1 東正 (1983) 『講座 なぜ行動変容の心理学なのか』。学研。

*2 ランメロ・トールネケ (著), 松見淳子 (監修), 武藤崇・米山直樹 (監訳) (2009). 『臨床行動分析のABC』。日本評論社。

*3 トールネケ (2013) 『関係フレーム理論(RFT)をまなぶ：言語行動理論・ACT 入門』星和書店。

*4 Malott, Maott, & Trojan(2000)では、「negative reinforcer」の代わりに「aversive condition」が使われています。

～ 68 頁】

この長谷川版・行動分析学入門でも、この趣旨に賛同して「好子」、「嫌子」を採用しておりますが、この呼称は行動分析学会で公認されたわけではなく、また最近でも「正の強化子」、「負の強化子」を採用（復活？）させている入門書もあるようです。

ちなみに、トールネケ(2013)の訳注(19頁)に説明されているように、原語で使われている「positive」と「negative」はあくまで、

「正の」＝「何かをプラスする」、「負の」＝「何かをマイナスする」

という意味であり、例えば、何かをマイナスしたことで強化される事例は「負の強化」と呼ばれることとなります。その意味では、いっそのこと

- 「正の強化」の代わりに「加算強化」あるいは「足し算強化」
- 「負の強化」の代わりに「減算強化」あるいは「引き算強化」と訳せば分かりやすくなったのかもしれませんが。

しかしながら、英語の「ポジティブ positive」には「積極的、肯定的」、「またネガティブ negative」には「消極的、否定的」というように、価値判断を含めて使われることがあります。これは、「何かをプラスする」、「何かをマイナスする」という本来の意味に誤解を与える原因となります。

さらに問題となるのは、

- 「強化される」というのは当該行動の生起確率が増えること
- 「弱化される」というのは当該行動の生起確率が減ること

というようにいずれも行動変容の現象記述として使われており、行動変容に影響を与える刺激・出来事を、「強化子」とか「弱化子」といった類似の言葉で呼んでしまうと、「強化子は行動を増やし、弱化子は行動を減らす」というように誤解される恐れがある点です。実際は、

- 強化子のプラスは行動を増やし、弱化子のプラスは行動を減らす
が正しい表現であり、マイナスする場合は
- 強化子のマイナスは行動を減らし、弱化子のマイナスは行動を増やす
という結果をもたらしています。

「強化子」、「弱化子」の代わりに「正の強化子」、「負の強化子」という呼称を使うと、上記はさらにこんがらがってきて

- 正の強化子のプラスは行動を増やし、負の強化子のプラスは行動を減らす
 - 正の強化子のマイナスは行動を減らし、負の強化子のマイナスは行動を増やす
- となって、数学の正負のかけ算ならともかく、イメージがわきにくい表現となってしまう

ます。

いっぽう、「好子」、「嫌子」という呼称を使えば、上記は、

- 好子のプラスは行動を増やし、嫌子のプラスは行動を減らす
- 好子のマイナスは行動を減らし、嫌子のマイナスは行動を増やす

となって、混乱を招く恐れがなくなるように思います。以上が、この長谷川版・行動分析学入門で「好子」、「嫌子」という呼称を採用した理由です。